

2017 年度 春の大セミナー

<5th D table 総評>

Judge

豊島（早稲田 4）北田（立教 4）

Table member

矢田部（法市 3）日野（明治 3）平山（明治 3）梶（立教 3）清岡（早稲田 3）伊東（早稲田 3）

構成

- 1.議論の流れ
- 2.順位選定理由
- 3.コメント

1.議論の流れ

文責:北田（立教 4）

本章では議論の大まかな流れを追います。我々ジャッジの解釈とテーブルメンバーの解釈にはズレがあるかもしれませんが、その点をご容赦下さい。また本総評に限らず、日本語へ変換されることで議論内容がいかに崇高または陳腐なものであるかが見えやすくなると思うので、そこも意識して読んでいただけると幸いです。

-Narrowing-

伊東がストラテとして自身の思考をテーブルメンバーと共有する。「medical purpose は医者が守るべきものであって政府が守るべきものではない。従ってこれについて議論する際は医者目線での物言いを為さねばならない。」彼がこれを担保するエビデンスを用意していた事もあり、短時間で思考の共有を終える。

-ASQ-

OP に立候補したのは矢田部（法市 3）、梶（立教 3）、伊東（早稲田 3）、清岡（早稲田 3）の 4 人である。全員がいわゆるモデルオピニオンシート（脳死者を強制的に臓器提供者とすることで臓器移植の件数を増大させ、より多くの患者の命を救う。）を用意していた。各人の差異は主にコンパリオンのロジックであり、その理解の後梶が OP として選出される。ASQ では後の議論に関わりそうな点をスムーズに一通り確認し、特に停滞もなく NFC、PLAN サイドへと移行する。

感想：類似したオピニオンシートが複数候補として挙げられたのであれば、この段階で論点を絞るという事も 1 つの選択肢になり得るのでは…？ 結果論ではあるが本テーブルにおいてここは大きな分岐点の 1 つであったように思う。

-PLAN-

前述の政策に対し、**practicability** において伊東が「今回の政策は医療目的に反し、政府はこれを採択する事ができない。」と主張する。同時に彼の提示した論点及び検証手順に沿って議論を執り行う事となる。伊東が指摘した政策の問題点は、「人の命を救うはずの医療によって人（脳死者）の命が奪われる」という点にあった。そして「こうした医療目的に反する行動をとる事で医者は多くの患者から信頼を失う。医療とは医者と患者の信頼関係があって初めて成り立つものであり、その崩壊は医療行為の停滞を招く。そしてそのような政策を政府は採択できない」という事であった。梶を中心にほぼ全てのテーブルメンバーによる徹底的な定義・前提確認を経て、梶から「そこまでして自分たちを助けようとする医者を見て、逆に信頼を強める患者もいるのではないか」という **exception** が提示された。伊東がこれをすぐに承認したためこの議論を終える事となる。

感想：**medical PPS** アーギュは語弊を恐れずに言えばよく見るアーギュであるが、今年私が見てきた限りその存在意義にまで思考を広げられている人は少なかった。その点で言えば彼のアーギュはよく練られたものであったが、タイムマネジメントは大きな課題である。3 時間という限られた時間で 1 人の思考理解に 1 時間も費やすなどあってはならない。この責任はテーブルメンバー全員にある。

-DA-

矢田部が提示した、脳死になったらドナーにならざるを得ないという環境に怯える日本国民が選出された。

-DA solution-

清岡が「国民の中にそのような状況を危惧して怯える人はいない」と主張する。その根拠は人が脳死に至る確率の極端な低さに依存した。それに対し平山が「ドナーカードで自身の臓器提供に反対している人がいるという現状から鑑みて、**DA TG** の存在証明は可能だ」と反論する。そこで平山が重視していたのは、実際にその事象が起こる確率よりも **TG** がどれほどそれを危惧しているかであった。結果として清岡の反論をサムカットとして認めた上でソリューションが立証された。**DA TG** は健康であってもドナーカードで臓器提供に反対している人を主とした危機意識の高い人物となる。

感想：サムカットの有用性については意見が分かれるかもしれないが、個人的には積極的に行うべきだと考える。TG とは特定人物ではない為、どこまで定義を詰めても「人によって違う」部分が生まれしてしまう。しかし TG が限定されればされるほどその点は減り、共通項が増えていく事もまた事実。そしてこれが多いほどコンパリは建設的になり易いのではないだろうか。結果としてこのサムカットは後に大きな意味を持つこととなる。

-Comparison-

梶が QL においては $AD > DA$ という主張の下、m/s の根幹への現実的な距離から degree を測るコンパリソロジーックを提示した。それは「両者の m/s の根幹は“死”である。しかし AD TG のそれは現実的なものであるのに対し、DA TG のそれはあくまで架空の事象であるという差異から苦痛の強度に優劣が生じる。」という idea である。この主張に対し前述の DA ソリューションの話を踏まえ、清岡は「重視すべきことは TG がどれだけその事象に危機感を持っているのかであり、DA TG はその点感度が高い」と指摘した。結局ワラントのプライオリティへの言及までには至らず、「データの V/P=TG における QL の強さは現実性と比例しない」という清岡の反論の検証途中で時間切れとなってしまった。

感想：梶に OP として立証したい強いロジックがあることは理解しているが、残り 30 分とない時間で 2 つロジックを検証することは中々難しい。結論の出せていない medical PPS についてのアイデアを提示するという選択肢も大切だったのではないだろうか。もし最初から自分の用意したコンパリ以外話すつもりがなかったのであればもっと早くに AD をとり、自分のロジックを立証すべきである。OP の舵取りはテーブルの出来栄を決める大きな要因になりえる事を忘れないでいてほしい。

2.順位選定理由

文責：豊島（早稲田 4）

1位 梶（立教3）

梶君はオピニオンプレゼンターとしてAD立論とコンパリロジックの提示で議論の主軸を作ったことを評価し1位としました。また、相手が何を言いたいのかをすばやく読み取るためにインタープリテーションをもつクエッションを出し、相手との理解に誤差が生まれないようにする姿勢も良かったです。今後は議論の内容や相手の意見を取り込んだ意見で議論を動かしていってくれることを期待しています。

2位 清岡（早稲田3）

2回に渡る反論の提示を行っていた点、またコンパリを見据えた一貫したスタンスを持ち介入し続けていた点で2位としました。想像できるかどうかというのが立論でどれほどの力を発揮するのか、DATG目線ではどうなのかなど、その論が成り立つためにという意識で矛盾点にいち早く気づいていた点が良かったです。今後は自分が議論を作っていくという意識をもって、「だからこうしよう」というサジェッションを打てるようになってきたらとてもいいと思いました。

3位 矢田部（法市3）

テーブルメンバーのニーズを組んだDAの提示、また要所要所での全員の理解を統一するカンファメーションを評価し、3位としました。わかりやすいプレゼンと議論を前に進めようとする姿勢が良かったです。今後はテーブルにない役割や自分が力を発揮できる得意な点を見つけ、議論に貢献できる場面を増やしてほしいと思います。

4位 平山（明治3）

清岡さんに対する反論提示とテーブルを前に進めるカンファメーションを評価し4位としました。平山くんは、発言回数は少なかったですが、ひとつひとつの介入は核をついているものが多く、もっと介入してほしいと感じました。やりきる強い気持ちを持って今後も頑張っていってほしいと思います。

5位 GANTZ（早稲田3）

ナローからのストラテと一貫したスタンス、プラカでの反論提示を評価し5位としました。3時間のほとんどを費やしましたが、そのほとんどを理解に費やしてしまったせいで議論のフェーズまで行かなかった事が悔やまれます。このことが順位にも反映されてしまいました。自分の言いたいこととテーブルとしてやりたいことを整理し、みんなを引っ張っていく力をつけてほしいと思います。

6位 日野(明治3)

ふと湧き出すクリティカルな疑問と浸透率の高いカンファメーションを評価し 6 位としました。日野くんは今回圧倒的介入量の少なさが順位としてあらわれてしまいました。最後まで諦めない姿勢が見たかったです。まだまだ伸びしろはあります、期待しています。

3.コメント

<豊島>

テーブルとしてよかった点は、相手が出した意見を退けたりすることなく、ちゃんと理解しようとする姿勢が全員にあったことだ。しかし、自分たちはどこに向かっているのかを意識した介入は見られなかったように思う。それぞれが結論をとる意識と春セミが終わる最後まで諦めない姿勢を持つてのぞんでほしいテーブルであった。気持ちの面でも技術の面でも、春セミに関わらず重要な力であると思うので、エキシビやもう一つの D テーブルにいるメンバーを越すためにも今後磨いて行って欲しい。

<北田>

今更ですが春セミお疲れさまでした！

5th D は良くも悪くも緊張感があまりない雰囲気である事が多いのですがこのテーブルも例外ではなく、梶くんが Narrow 中に「Please be serious」って言っていた事が個人的には強く印象に残っています。勝ちにこだわるディス、雰囲気の良いディス、楽しむディス、深めるディスなど各々のやりたいディスカッションがあると思います。これらは必ずしも共存するものではなく、必ずしも乖離するものでもないと思います。このテーブルに関して言えば勝ちにこだわる意識が全体として非常に低かったと感じているのですが、だとしたら勝ち以外で自分がこだわりたいものにはこだわりましたか...?ここからは私の主観が多分に含まれますので読み流して頂いて構いません。一個人の小言として記しておきます。議論の意義や醍醐味は肯定・否定を繰り返すことで本質を探り合い、一人で考えていた時には到達できなかった閃きを得る事にあると僕は思います。それは時として質問の応酬によってでは到達することが出来ず、直接的に意見をぶつけ合うことで得られる事が多いのではないのでしょうか。そしてそういった事柄を議論と呼ぶのであればこのテーブルは議論の時間がほとんどなかったように思えます。雰囲気の良さに割に皆が皆なりの議論を楽しんでいるようにあまり見えなかったのは私だけでしょうか...?5th D テーブルにいる皆さんはきっと議論をする上で必要な最低限のスキルはもう身についているはずです。今後は出来上がった土台の上で何を展開するのかをもっと考えてほしいと思います。春セミが終わって間もないですがそろそろアッセン期に突入します。後悔なく引退できるようにまた頑張ってください。お疲れさまでした！

